

東京に桜の開花宣言が出される中、品川の桜も大きな蕾となつて、芳醇な春の色を育んでいます。この春の息吹は、卒業生の門出を祝うかのように、この地に吹き込んできています。

品川女子学院第七十期生の卒業式がここに挙行できますことを、皆様方に心より感謝申し上げます。

本日はご多用にもかかわらず、本校PTA・芳葉会・後援会関係者の皆様をはじめとする来賓の方々のご臨席を賜り、厚く御礼申し上げます。

また、保護者の皆様方におかれましても、六年間にわたる学校生活を修了し、新しい生活に胸を膨らませているお嬢様の晴れの姿を目の当たりにし、お喜びもひとしおのことと存じます。本校にとっても、成長したお嬢様たちの姿を、今ここにお見せできますことは、我々教職員にとってこの上ない喜びでございます。

そして、先ほど卒業証書を授与しました

七十期生二一一名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんは今、この晴れの舞台に立ち、本校で過ごした時間を思い出すと共に、これから始まる新しいステージに向けて、大きな夢を膨らませていることと思います。

皆さんは、品川女子学院の生徒として「世界を心に」の言葉を胸に、能動的な人生を創ることを目標にして、日々精進してきました。

それに加え、五学年にわたる後輩たちの範となつて、学業、学校行事、生徒会活動、クラブ活動、委員会活動などを牽引すると共に、地域からの信頼も得てきました。

また、学年の仲間達とは、二一一名がまるで一つのクラスのように、何事にも一丸となつて取り組み、常に切磋琢磨しあい、お互いを高めあつてきました。この四月から始まる新生活の場でも、本校で培った力を如何なく発揮してくれることを期待しています。

本校からの旅立ちに際し、松尾芭蕉の句を贈ります。

行く春や鳥（とり）啼（な）き魚（うお）の眼に涙

この句は、芭蕉が「奥の細道」の吟行に際し、矢立初め、つまり初めて詠んだ句です。芭蕉は、「奥の細道」の出発地である千住の宿で、多くの人達に見送られたことを受け、

「春が行ってしまうのだから、人のみならず、鳥が鳴き、魚までもが涙を浮かべて別れを惜しんでいる」

と自分と他者の両方の心境を描いてみせたのです。

つまり、芭蕉は三千里に及ぶ「奥の細道」の旅立ちに際し、様々な形で今まで自分を支え、見送ってくれた人達への感謝の気持ちを込めてこの句を詠んだのです。

数年前、ハーバード大学大学院の卒業式に於いて、日本史専攻のカナダ人留学生が三万人を超える聴衆を前にしてこの句を

紹介しました。

学び舎を巣立つ我々は、芭蕉のように旅立つまでにお世話になった周囲の方々に対して、感謝する気持ちを常に忘れず、新たな旅に向かおうではありませんかとスピーチしたのです。

これこそが皆さんが培ってきた共感力や思いやりの心なのではないでしょうか。皆さんも芭蕉と同じように、今まで支えてくれた家族をはじめとする他者への気持ちを忘れず、新たなステージへ旅立つて欲しいのです。

その際、皆さんに心掛けて欲しいことがあります。皆さんは、サンデグジュペリの「星の王子様」を読んだことがありますか。

主人公の王子のふるさと星には、おしやれで無邪気で、たまに王子を困らせる薔薇がいました。旅に出た王子は違う星で多くの薔薇に出会い、ふるさと星の薔薇のことを忘れかけます。しかし、旅の終わりに王子は気付くのです。自分が愛する薔薇は、

ふるさとの星に残してきたあのたった一本の薔薇だけだと。自分が美しいと思い、一生懸命心を込めて世話をした薔薇は、自分にとって一番の薔薇なのだ。

皆さんがこの六年間の中で、一番大切にしてきた「心の薔薇」は何んだっただけでしょうか。一生懸命打ち込んだもの、そしてそれに費やした時間、それこそが皆さんの「心の薔薇」なのです。星の王子様のように、皆さんも掛け替えのない自分の「心の薔薇」に気づいて欲しいのです。

そして、皆さん自身も王子の心に響いた薔薇のように、自分らしく、凜と咲き続けて下さい。自分の目標に向かって努力する姿勢は、「志願無倦（しがんうむことなし）」の精神に繋がるのです。皆さんならきっと、多くの人の心を響かせる「心の薔薇」になれると信じています。皆さんは、この世に一輪だけの素晴らしい個性を持った薔薇なのですから。

そして、「心の薔薇」を持ち続けるため

に、ある作家の言葉を贈ります。

『君のポケットには何がありますか。

「新しい世界に早く飛び込みたい」「まだ卒業したくない」という声が聞こえるかもしれない。』

それが皆さんの今の気持ちかもしれない。そんな。そこで、作家はこう続けます。

『君のポケットに簡単に大人を入れな  
いで欲しい。君のポケットには、夢が、希  
望が、音楽が、ファッションが、そして好  
きな人の笑顔も入っているはずだ。そして、  
悩みや、口惜しさや、ため息や、涙も、ち  
やんとあるはずだ。実はそれが一番大切な  
ものなんだ。それらを手離さずに、新たな  
世界に旅立って欲しい。何でかって。世界  
に一人しかいない君。そのポケットにある  
ものこそが新しい世界の可能性に繋がる  
からだ。』

そんな素晴らしいポケットを持ち、「心の薔薇」を大切にしている皆さんにお願いです。たまには学校に来て、皆さんのポケットの声を私達に聞かせてくれませんか。

結びに、本日この晴れの舞台に立つ二一名が無事卒業することができましたのは、卒業生や本校だけの努力では決してありません。ここにいらっしやる保護者、芳葉会、後援会、そして地域の皆様が本校の教育活動を理解し、卒業生に対してご支援・ご協力を頂いた賜物であり、心より感謝申し上げます。

ここに、卒業生一人一人が品川女子学院七十期生としての誇りを胸に、本校を心の支えとして歩むことを期待し、校長告辞といたします。